

パーキンソン病の分子病態 – α シヌクレイン伝播仮説を中心に–



京都大学
総合研究推進本部(KURA) 参与
医学研究科多系統萎縮症治療学講座
特定教授

高橋 良輔氏

パーキンソン病(PD)は運動緩慢、振戦、筋強剛などの運動症状と、自律神経症状、睡眠異常、嗅覚低下などの非運動症状を特徴とする、高齢者に多い進行性の神経変性疾患である。高齢化の進行と環境要因、ライフスタイルの変化により患者数が世界的に増え続けており、「パーキンソンパンデミック」との警鐘が鳴らされている。PDの病理学的特徴はレヴィ小体と呼ばれる細胞質内封入体である。レヴィ小体はPDの原因に密接な関連があると考えられてきた。レヴィ小体の主成分はアルファシヌクレイン(aSyn)というシナプス前領域に豊富に存在する140アミノ酸からなるタンパク質であり、aSynが構造異常を生じ、凝集し、レヴィ小体が形成されることが考えられる。近年レヴィ小体が細胞間を伝播してパーキンソン病の病理が進展するとの仮説が臨床研究や動物実験に基づいて提唱され、注目を集めている。本講演では我々のデータを含めて伝播仮説の概略と最近の知見をレビューする (Takahashi R, et al. The gut- brain axis based on a-synuclein propagation -clinical, neuropathological and experimental evidence- *Int J Mol Sci*, 2025)